



Data

監督: クラウス・ハロ

脚本: アナ・ヘイナマー

出演: ヘイッキ・ノウシアイン/
ピルヨ・ロンカ/アモス・ブ
ロテルス/ステファン・サウ
ク/ベルッティ・スヴェホル
ム/ヤコブ・オーマン/クリ
ストファー・モラー/イー
ロ・リタラ

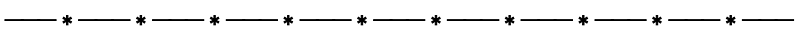
👁️👁️ みどころ

19世紀のロシアでは、文学も音楽も大きく花開いたが、芸術（絵画）は？ロシアの巨匠レーピンとは？

オラヴィが作者不詳の肖像画に惚れこんだのはさすがだが、それをいくらで購入し、いくらで売却するの？年老いた美術商としての「ラスト・ディール」は如何に？

そう思っていたが、落札価格は1万ユーロ（118万円）だから、勝負は意外に小さいし、その程度の資金繰りにアップアップする姿は何とも情けない。他方、彼の在庫商品（棚卸資産）の価値は一体How Much？

そんな疑問点も多いが、「名は体を表す」を地で行く、邦題通りの展開はそれなりのもの・・・。



■□■フィンランド発のこんな小品にも注目！■□■

アカデミー賞は、第92回からそれまでの「外国語映画賞」が「国際長編映画賞」に名前が変わり、ポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』（19年）が作品賞、監督賞、脚本賞と共に、名称変更後初の同賞を受賞した。他方、第88回アカデミー賞でフィンランド代表の外国語映画賞に選ばれたのが、クラウス・ハロ監督の『ここに剣士を』（15年）（『シネマ 39』239頁）だった。

そんなクラウス・ハロ監督の最新作が本作だが、本作は引退間際、自身の存在の証明のためにも究極の作品を見出したいと願う老美術商と、長年確執を抱えたままの家族が出会った「幻の名画」をめぐる、それぞれの悲喜や葛藤を丁寧にエモーショナルに描き出した

ものだ。しかし、そんな映画の邦題がなぜ『ラスト・ディール』なの？ディール (deal) とは、ここでは「売買する」の意味のはずだが・・・？

■□■年若い美術商は、なぜこの絵に注目したの？■□■

本作の主人公は、年若い美術商オラヴィ (ヘイッキ・ノウシアイネン)。自分で店舗を構え、販売用の絵をたくさん飾っているが、店員はおらず、自分1人で経営しているらしい。オラヴィは何よりも仕事を優先してきたため、家族も例外ではなかったが、今は長い間音信不通だった娘レア (ピルヨ・ロンカ) に頼まれ、問題児の孫息子オットー (アモス・プロテルス) を職業体験のため数日預かることに。

そんなオラヴィがいつも通っているオークションハウスで目にとめたのが、1枚の肖像画だ。長年の経験から彼は一目で価値があると確信したが、その絵には署名がなく、作者不明のまま数日後のオークションに出品されるらしい。オークションハウスの若社長ディック・サンデル (ヤコブ・オーマン) はそんな肖像画に全然興味を示していなかったが、オークションでオラヴィが競落した後に発見された手紙を読んだ彼は・・・？他方、この肖像画の価値を直感したオラヴィはオットーと共に作者を調べ始めたが、それは一体どんな方法で？

■□■ロシアの巨匠レーピンを知ってる？彼の絵の価値は？■□■

私はゴッホやセザンヌ、さらに近々公開される映画『盗まれたカラヴァッジョ』(18年) のカラヴァッジョも知っている。さらに、『プラド美術館 驚異のコレクション』で、王家が慈しんだコレクションとされている、ベラスケスやゴヤ、エル・グレコ等もよく知っている。他方、ロシアの芸術は、19世紀に至って、文学ではドストエフスキー、トルストイ、プーシキン、音楽ではチャイコフスキー、ムソルグスキー、ボロディンが一気に有名になったが、美術は？

本作のパンフレットにある中野京子氏のコラム「ロシア美術を代表するレーピン」によれば、「美術ではレーピン、クラムスコイ、シーシキンと大輪の花ばかり」と書かれているが、寡聞にして私はその3人の誰も知らなかった。しかしてあなたは、ロシアの絵画の巨匠レーピンを知ってる？そしてまた、彼の絵の価値はHow Much？

■□■邦題の意味は？ホントにこれが「ラスト・ディール」？■□■

私は基本的に弁護士の仕事が大好きだが、カネのために動くのは大嫌い。①依頼者の相談を聞き、②法的な解決方法を見つけ出し、③共にそのための努力をして問題を解決し、④喜んでもらって、⑤喜んでお金を払ってもらおう。すべてがそんな事件で、すべてがそんな幸せな展開になれば万々歳だが、なかなかそうはいかないところに苦労がある。そこで、金のために嫌な事件に手を出す弁護士も多いが、私は断じてそんな弁護士にはなり

たくないし、なっていないつもりだ。そんな視点で、1枚の絵に見入っているオラヴィの姿を見ると、その肖像画の価値を認めていることは確実だが、あくまでそれは美術商としてだから、そこではその胸の中は「いくらで購入しいくらで売却すればいくら儲かる」。そう計算していることも間違いない。

私はオークションの正確な仕組みがわからないが、この肖像画をオークションで落とすには数千ユーロから1万ユーロかかるらしい。しかし、オラヴィの手持ちの資金にはないから、それを買うには銀行や友人から金を借りるしかないが、それはムリ。そこで、最後の頼りが娘のレアだったが、それも到底ムリ。しかし、オットー名義の預金があることがわかると、ついオラヴィはそれを当てにすることに・・・。

新型コロナウイルス騒動の主戦場が、中国からヨーロッパとアメリカに移行している現在、円とユーロ、ドルの為替相場は目まぐるしく変動している。しかし、本作の邦題とされている『ラスト・ディール』で、オラヴィがオークション会場で競り落とした肖像画の価格は1万ユーロ。オラヴィはこれをレーピンの愛好家であるアルバート・ジョンソン（ステファン・サウク）に12万ユーロで売ろうとし、ジョンソンは即座にそれをOKしたから、オラヴィはラッキー。肖像画がレーピンの隠れた名作であることをオラヴィと共に懸命に調べ上げたオットーもそれは同じだ。しかし、3月20日現在、1万ユーロは118万円。これを12万ユーロで売れば、約1000万円の儲けになるが、ホントにこれが長年美術商を営んでいたオラヴィの「ラスト・ディール」なの？

■これが疑問！在庫品の価格は？■

他方、私に最後まで残った本作の疑問点は、オラヴィの店にはたくさんの売却用の商品（絵）があるのに、それが全然おカネに評価されていないこと。美術商であるオラヴィの店の決算書の貸借対照表の資産の部には、必ず棚卸資産としてそれが計上されているはずだ。しかも本作では、オラヴィがやむなく美術商をたたむについて、若手の美術商（イェロ・リタラ）に事業譲渡するシーケンスが登場するが、そこでも家主との転貸や賃料の話は出てくるのに、在庫商品（棚卸商品）をどう評価するかの話がまったく出てこないからそれが不思議だ。

そもそも美術品の価格は不確定で、人の好みによって異なるが、それでもそれなりの相場はある。したがって、レーピンの肖像画を「12万ユーロでどうか？」と言われたジョンソンが、それをOKした一方で、その価格の根拠を調べたのはある意味で当然だ。本作ではそれがいかにも簡単にできてしまう点が疑問だが、それによって、オラヴィの一世一代の「ラスト・ディール」がポシャってしまうのもナンセンス。オラヴィはジョンソンに対して、「他にも買い手はあるが、まず最初にあなたに声をかけた」と言っていたのに、それは真つ赤な嘘だったの？長年美術商を営んできたオラヴィの取引範囲はそんなに狭いの？さらに、若い美術商に1万ユーロで店を事業譲渡することによってオットーへの借金

の返済を済ませたオラヴィは本作ラストでは死亡するが、その相続をめぐるレーピンの肖像画の価格問題が再浮上する。そこにサンデルが再登場し、レーピンの絵に何の愛着もないレアから1万ユーロで買い戻そうとする姿はいかにも醜くあさましいが、さて、レアはどうするの？そして、そこに登場してきた、レーピンの絵の価値を十分わかっているオットーはどうするの？

そんなこんなを考えると、『ラスト・ディール』と題された本作の、「ラスト・ディール」の規模（価格）の小ささに驚くとともに、オラヴィの在庫商品の価格をめぐる私の疑問点は膨らむばかりだ。まあしかし、それはそれとして、本作はそれなりに楽しむことに・・・。

2020（令和2）年3月25日記